

《ズビグニェフ・ヘルベルト詩集より》乗原成郎訳

想像力という小箱

Pudełko zwane wyobraźnią

指で壁をたたいてみてごらん—
櫛の切株から
とび出してくるよ
お人形さんが

樹を呼び出すよ
一本また一本と
ついに出来るよ
森が

口笛を吹いてごらん 静かにね
おや流れ出したよ 小川が
強い糸だよ
山と谷をつなぐ糸だよ

咳払いをしてごらん 意味ありげに—
ほら 都市(まち)が出来たよ
一基の望楼が立ち
狭間(はざま)を設けた城壁があり
黄金(こがね)色の家並みがある
遊び道具の
骰子(さいころ)を投げたようだね

今度は
目を閉じてごらん
雪が降ってきて
消してしまうよ
樹々の緑の炎を
赤い望楼を

雪の下には
夜がある
その頂には煌(きらめ)く大時計があり
風景画の梟(ふくろう)が止まっている

木製の小鳥 Ptak z drzewa

子どもたちの
熱い手の中で
木製の小鳥は
生きはじめ

ラッカー塗りの羽根の下で
小さな心臓が溢れ出た

ガラスの目が
眼差しとなって燃え上がった

色塗りの翼が
動き出した

乾いた体が
森へ行きたがった

行進していった
バラードの兵士のように
脚の撥(ばち)で太鼓をたたいて
右の脚でたたくと—森
左の脚でたたくと—森
夢に見た
緑色の光と
閉じた目の瞼(まぶた)の
底に罅(ねぐら)を

森のはずれで
啄木鳥(きつつき)たちが彼の目をつつき出した
がさつな嘴(くちばし)の拷問のために
小さな心臓は黒ずんだ
それでも先へ進んでいった
毒きのこにぶつかり
高麗(こうらい)鶯(うぐいす)たちに嘲笑(あざわら)われて
死んだ落ち葉の下に
罅を探した

今や生きている
有り得ない境界に
蘇生した物質と
考案された物質との間に
森の羊歯(しだ)と
ラルース辞典の羊歯との間に
一本の枯れた茎の上に
一本の脚の上に
風の髪の上に
現実からちぎれ落ちた物の上に
心臓が十分に無い
力が十分に無い物の上に

画像に
生まれ変わることはない

(Zbigniew Herbert “Studium przedmiotu”
『事物研究』より)

《ズビグニェフ・ヘルベルト詩集より》 2

栗原成郎訳注

母とその息子 Matka i jej synek

森のはずれの小屋の中で母親と息子が悠々自適の生活を送っていた。母子の愛は固かった。非常に。共に日没を眺めて過ごし、慣れ親しんだ歳月を育てていた。二人とも死にたくなかった。しかしママが死んだ。お母さんっ子は一人ぼっちになった。実際に、それは寝台の方角を向いた十分に古びた小さな絨毯(じゅうたん)だった。

(『ヘルメス、犬と星 Hermes, pies i gwiazda』より)

母 Matka

彼は彼女の膝から毛糸の巻き玉のように転げ落ちた。巻いた毛糸が急いでほどけて、やみくもに逃げだした。彼女は生命の初原を指のまわりに大切な指輪のように巻き付けて保った。守りたかったのだ。彼は急斜面を転がって何度か山に向かって登ろうとした。もつれた姿でたどり着こうとした。もはや決して彼女の膝の甘い玉座に帰ることはない。

差し伸べた手が闇の中に旧市街のように輝く。
(『パン・コギト Pan Cogito』より)

父をめぐる思索 Rozmyślania o ojcu

彼の顔は 幼年時代の大海原の上の黒雲の中にあって厳(いか)めしい
(それでぼくの暖かい頭を手の中に置くことは稀にしかなかった)

過失を容赦しないという信念をつらぬいた
なぜなら 森林を切り開き 小道を真っすぐに均(なら)し
ぼくらが夜に入ると ランタンを高く掲げて行ったからだ

ぼくは彼の右手に座って
共に光を闇から分離させ
ぼくら生ける者を裁くことを 考えた
—そうはならなかった

古道具屋の店員が手押し車に彼の玉座と
抵当証書 ぼくらの領土の地図を積んで運んだ

もう一度生まれた きわめて脆弱(ぜいじゃく)で小さな子が
透き通った皮膚 ほんのかすかな軟骨をもった子が
ぼくが受け容れることができるようにその体を縮小した

重要性のない場に石の下に影がある

彼自身がぼくの中で成長して自分たちの敗北を共に食らい
二人で大笑いする
和解する必要はほとんど無い
と人が言う時

(『パン・コギト Pan Cogito』より)

おばあちゃん Babcia

ぼくの最高に聖なるお祖母(ばあ)ちゃん
体にぴったり合った長いドレスを着ていた
無数の量の
ボタンで
留まった ドレス
蘭(らん)のように
群島のように
星座のように

彼女の膝の上に座ると
彼女はぼくのために話をしてくれる
全世界のことを
金曜日から
日曜日まで

話に聴き入って
ぼくはすべてのことを知っている—
—彼女の話から
話に出てこないのは彼女の出身のことだけ
お祖母ちゃんはバワバン[Balaban のろま]家出の
マリア
マリア・ドシフィヤッチナ[人生経験豊かな]

何も話してくれないのは
大量虐殺のこと
アルメニアの
トルコ人による虐殺のこと*

ぼくは数年間におよぶ幻覚から
のがれたくなっていた

彼女は知っている ぼくが待っていることを
そしてぼく自身が知っていることを
呪詛と悲嘆の言葉を除外して
言葉の
ざらざらした
表面と
底辺を

(『嵐のエピローグ Epilog burzy』より)

* 19世紀～20世紀初頭のオスマン帝国内のアルメニア人の強制移住・虐殺。詩人の祖母(父の母)はアルメニア人

黒い薔薇 Czarna róža

生成されたのは
黒色
失明した眼から
消石灰が原因で*

* wapno (石灰、消石灰)
は中世には魔術に用いら
れ、バルカンでは「吸血鬼」
退治に用いたようです。消
石灰は目に入ると失明する
と、危険視されていました。

空気に触れると
現れた
ダイヤモンドが
黒い薔薇が
惑星たちの混沌(カオス)の間に

空想の小さな牧笛を
吹きながら
導き出せ
黒い
薔薇を
色彩を
焼失した都市から
記憶を呼び出すように
堇(すみれ)色(いろ)を一毒物と大聖堂のために
赤色を一ピフテキと皇帝(カイゼル)のために
空色を一大時計のために
黄土色を一骨と大洋のために
緑色を一樹に変容した若い娘のために
白色を一白色のために

黒薔薇の中の
黒い薔薇よ
何を隠しているのか
死んだ電子の小蠅(こばえ)たちの間に
(『事物研究 Studium przedmiotu』より)

事物研究 Studium przedmiotu

1

最も美しいのは
存在しない事物

水運びには役立たず
英雄の遺骨の保管にも役立たない

アンティゴネーの胸に優しく抱(いだ)かれたこともない
その中には溝鼠(どぶねずみ)も溺れはしない

孔(あな)を持たず
全体が開かれている

あらゆる面から
観察される
つまり それは辛(かる)うじて
予感されるだけ

そのすべての線の
毛髪が
結び合わされて
光の一条(ひとすじ)の流れとなる

失明も
無く
死も
無い
存在しない事物
取り去られることはない

2

しるしを付けよ
存在しない
事物が占める場所に
黒い正方形のしるしで
それは成る
美しい不在者を悼む
単調な哀歌に

男の悲哀
四角形の中に
閉ざされた

3

今や
全空間が
大洋のように増水する

暴風雨が
黒い帆を激しく打つ
吹雪の翼が旋回する
黒い四角形の上に

そして島が沈没する
塩の増水の下に

4

今やあなたは持つ
真空の空間を
事物よりも美しい

事物の占める場所よりも美しい真空を
それは世界以前の場
あらゆる可能性の
白い楽園
あなたはそこへ入ることができる
叫ぶことができる
垂直面—水平面

垂直の電光が
裸の水平面を撃つ

われらはそこで満足することができる
そのようにあなたはすでに世界を創造したのだから

5

聴け 内なる眼の
忠言を

屈服するな
囁き 唸り声 舌打ちに
それは創造されざる世界
絵画の門の前で人々はひしめき合う所

天使たちが差し出す
薔薇色の雲の綿を

樹々がいたるところに
むさくるしい緑色の毛髪を挿し込む

王たちが紫を讃美し
喇叭手(らっぱしゅ)たちに命じる
金鍍金(きんめつき)をせよと

鯨でさえ肖像画を要求する

聴け 内なる眼の忠言を
誰も中に入れるなという

6

抽出せよ
存在しない
事物の影から
極地の空間から
内なる眼の切実な願望から
一脚の椅子を

美しくて無用なもの
原始林の中の大聖堂のよう

置け 椅子の上に
しわくちなテーブルクロスを
付け加えよ 秩序の理念に
冒険の理念を

信仰告白であらしめよ
水平面と格闘する垂直面の前で

天使たちよりも
穏和であれ
王たちよりも誇り高くあれ
鯨たちよりも実質的であれ
究極の物質の相貌(かお)を持って

われらは願う 表明せよ椅子を
内なる眼の眼底を
必然性の虹彩を
死の瞳孔を

(『事物研究 Studium przedmiotu』より)

事物たち Przedmioty

無生物の事物たちはつねに完璧無欠であって、不幸なことに、干渉し得るところは一点も無い。わたくしは椅子が脚を組み替えるのを一度も見たことがなく、寝台が後ろ脚で立つのを見たことがない。同様に、食卓は、たとえ疲れている時でも、あえて膝をつこうとはしない。事物たちは、わたくしたちの不安定性を絶えず諫めるために教育的な配慮からこのことをするのではないだろうか、とわたくしは思う。

(『ズビグニェフ・ヘルベルト 89 の詩
Zbigniew Herbert 89 wierszy』より)

ズビグニェフ・ヘルベルト(1924～98) ポーランドの詩人、エッセイスト、劇作家。第二次世界大戦中は国内軍のレジスタンス活動に参加。1950年代に詩を出版しはじめたが、間もなく自分の意思で政府公認の出版物に書くのをやめ、1980年代に主に地下出版で発表を再開。戦後ポーランドの反体制派詩人を代表し、最も有名で最も数多く(38ヶ国語に)翻訳された作家の一人で、何度もノーベル賞候補に挙げられた。1986～92年にはパリに住み「文学手帖」誌に寄稿。2008・2018年は政府・議会により「ヘルベルト年」と宣言され、2013年ズビグニェフ・ヘルベルト国際文学賞が設けられた。



(en.wikipedia より)

photo: Bohdan Majewski / Forum, 1974